

## 海洋深層水利用促進委員会 2019 鹿児島大会報告

利用促進委員会委員長 山田 勝久

今年の利用者懇談会は、海洋深層水利用学会の前夜にあたる10月9日（水）の午後3時15分から鹿児島大学学習交流プラザ2Fホールに60名を超える参加者を集めて開催されました。

鹿児島大学の有川博幸先生の司会の下、本大会実行委員長である前田広之先生（鹿児島大学産学・地域共創センター長）による開会の挨拶でスタートしました。はじめに基調講演として課された「地球に残された最後の資源－海洋深層水の産業的価値」の命題に基づき、当学会利用促進委員会からキックオフ講演を行いました。次に本会のテーマである「水産分野への利活用」について、鹿児島海洋深層水協議会の山本求之会長が本ディスカッションのコーディネーターとなられて、3名のパネラーからプレゼンテーションがありました。

最初に登壇された上述の前田広之先生からは、地元甑島の海洋深層水利活用研究について講演がありました。九州で唯一、海洋深層水の取水施設を有する甑島における地域産品高度活用実証ラボとして、文部科学省国立大学法人機能強化促進費事業南九州・南西諸島域の地域課題に応える研究成果の展開とそれを活用した社会実装による地方創生推進事業の一部として海洋深層水を活用した高度な複合養殖施設の実験装置を整備されたとのことでした。この施設における養殖試験では他の餌を一切与えず、水槽内で深層水に含まれるミネラルで増殖した付着藻類を餌としてアワビは十分に生育したとのこと、こうした高価値水産物の養殖資源として海洋深層水の可能性を示されました。

次に野田浩之氏（静岡県水産技術研究所深層水科科长）からは、静岡県水産技術研究所における海洋深層水利活用研究と題して講演され、2004年より本格的にスタートされた水産増養殖分野への応用研究についてお話しされました。特に水産利用における駿河湾海洋深層水の特性である窒素や燐などの栄養塩を多く含む‘高栄養性’、細菌等の少ない‘清浄性’、1年中低温で安定した‘低温安定性’を活かして、磯焼け現象による藻場の消滅とこれに伴うアワビ等有用な藻食性動物の消失対策として、カジメやサガラメといったコンブ科の大型海藻の培養研究に取り組み、種苗を効率的に生産する技術開発で貢献されてきたそうです。現在は生育水深が浅く、藻食性魚類による食害を受けやすいサガラメに適した移植方法の開発や養殖技術の開発に取り組まれているとのことでした。

最後に鷲足恭子氏（株式会社ジーオー・ファーム000）が2012年から沖縄県久米島の海洋深層水による世界初の挑戦であるカキの完全陸上養殖事業への取り組みについて、全国にオイスターバーを28店舗（2019年9月現在）展開する株式会社ゼネラル・オイスターのグループ会社として、この取り組みの経緯から社会的意義に至るまで、幅広い視野に渡って非常に魅力的な講演を頂きました。今後もオイスター事業への海洋深層水の利活用と共に我々が受け継がせて頂いた現在の水産技術をより進化発展させ、次世代を担う子供たちに引き継いで行くことを使命と考えて、年々深刻化する海洋の環境汚染がカキを始めとする水産物に直接的な被害を直視しつつ今後も取り組まれるとのことでした。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、会場からも多くの意見や質問が上がり、利用者懇談会としての原点と開催の意義を会場の参加者一人一人が等しく供給するという、極めて有意義な懇談会となりました。

末筆となりましたが、今回素晴らしい会場を設営下さいました鹿児島大学および鹿児島海洋深層水協議会の皆さま、遠路ご講演に登壇下さいましたパネラーの皆様、そしてご多用の中、本懇談会にご参加下さいました皆さまに心よりお礼申し上げます。

(DOWAS 利用促進委員会 山田勝久)



鹿児島海洋深層水協議会 山本求之会長



キックオフ講演 筆者 (株DHC)



パネラーの先生方

左から野田浩之様 (静岡県水技研), 鷺足

恭子様 (株ジーオー・ファーム)

コーディネーターの山本求之様 (鹿児島海洋深層水協議会)



鹿児島大学産学・地域共創センター長  
前田広人教授



講演に感心を寄せる参加者

